

権謀術数のFIDESZ:ポピュリズムは勝利するか

盛田 常夫

4年に一度の審判の日がやってきた。社会党の続投になれば、体制転換以後、初めて2期連続政権が誕生する。他方、FIDESZが勝てば、選挙の度に政権が交代する「体制転換の法則」が依然として貫徹していることになる。国民の判断がどう出るか、興味深い。

さて、政権奪取を狙うFIDESZだが、もう形振り構わぬ大盤振る舞い攻勢にでている。年金生活者には従来の13ヶ月目の支給に加えて14ヶ月目の支給を、雇い主には公課負担の10%削減(29%から19%への削減)を、ブダペスト市民には未だ建設されていない地下鉄4号線に加えて5号線構想やドナウ河歩道橋構想を、さらには起業家振興奨励金として5000億Ft規模の無償資金も約束している。他方、これらを賄う資金については、雇用が増えるから税収も増えるという説明しか与えていない。

「いくら教育のない者でも、こんなに約束されたら眉唾ものだ。天からカネが降ってくる訳でもあるまいし、後が怖い」と感想を漏らした知人がいる。「権力奪取のためには、何でもあり」という焦りが見られる。功を焦った「お粗末民主党」とダブって見えるが、果たしてハンガリー国民はこのポピュリスト政策にどう回答するのだろうか。

さらに、選挙戦も終盤の3月19日、首相候補指名大会でFIDESZの副首相候補に指名されたミコラ・イシュトヴァーンは、在外ハンガリー人500万人に二重国籍と選挙権を付与すれば、20年間はFIDESZ政権が安泰だと口を滑らした。二重国籍問題を特定政党の利益に結びつけようという本音は見え透いた権謀術数で、不見識の誹りを免れない。FIDESZから清新な若者の党というイメージが消えていると感じている人は多い。

FIDESZは右、それとも左?

今、ハンガリーのみならず、ほとんどの旧社会主義国の政治では、右と左の捻れ現象が見られる。「左翼」と呼ばれる政治勢力が主張しているのは旧右翼の政策で、反対に「右翼」が主張しているのが旧左翼の政策なのだ。もう右とか左という名称は有名無実化しているが、ヨーロッパでは後生大事に「左」と「右」に区別が大仰に主張される。これほど時代遅れの認識はない。

ハンガリーで右を自称するFIDESZは、共産党の過去をもつ社会党をイデオロギー的に攻撃する手法を使っている。その攻撃手法は旧共産党が使っていた権謀術数を駆使するものだ。納税者同盟を名乗り、社会党の指導部を個人的に攻撃した号外ビラMagyar Vizslaの校正刷り原稿が、FIDESZ本部から印刷所に送られたことは社会党によって暴露された。また、FIDESZ本部のサーバーを介して、社会党の選挙本部サーバーへ入り込み、選挙関連の数千のファイルを取り込んだことも暴露された。社会党の立候補者の遊説先を知り、事前にその地域に先手を打つためだった考えられる。FIDESZの弁明は潔くなかった。

FIDESZのスローガンは、「仕事、家庭、家族」である。確かに、ここには内向きの保守主義がある。外国資本の支配を排し、市場の横暴から生活を守り、中小企業を活性化して仕事を創造する。FIDESZはハンガリーの市場経済を野蛮な資本主義だと批判し、ここから生活と仕事を守るといふ。しかし、ちょっと待って欲しい。ハンガリー経済はまだ、よちよち歩きの未熟な市場経済ではないか。これを野蛮と認識するようでは、まだ認識が甘いと言わざるを得ない。素朴な共産主義者の認識レベルだ。

これにたいして、社会党は市場経済の推進者で、資本主義の政党である。明らかに、党名と政策は矛盾している。

「ハンガリー資本主義党」に名称変更した方が分かり易い。要するに、もう右とか左という区別には何の意味もない。だから、FIDESZは過去の共産党時代の弾圧の記憶を呼び起こして社会党を批判する戦術をとっているが、そのアナクロ的な政治攻撃が場違いな印象を与えている。

MDFのスタンス

前回の選挙ではFIDESZの支援を得て国会に議席を得たMDFだが、半数以上の議員が脱党してFIDESZに合流したために、この両党の関係はこじれきっている。今回の選挙では5%条項に引っかかって、国会に議席を獲得できない可能性が高い。そのMDF党首、ダーヴィッド・イボヤが面白いことを言っている。

「FIDESZが主張しているポピュリスト政策は、健全な保守の政策ではない。彼らの政策は左翼の政策であり、旧

体制のカーダール時代のばらまき政策そのものだ。この政策を続ける限り、FIDESZとの連立はあり得ない。もしFIDESZがMDFに連立を申し込む事態が生じた場合でも、責任ある政策を実行するために、MDFに首相の座を渡さない限り、連立政府の樹立はあり得ない」。

ダーヴィッド党首は、「右」を自称するFIDESZの政策が旧左翼の政策であり、カーダール時代の政策と本質的に同根だと断言している。そして、このようなポピュリストのFIDESZよりは、社会党や自由民主連合への閣外協力が望ましいとまで言い切っている。

選挙後の展望

FIDESZは公課負担1%の削減で、雇用が1万人以上増えると主張する。10%の削減で、10万人以上の雇用が増えるという単純な比例関係を前提し、かつ公課削減と同時に、雇用が即時に増えることも前提する。雇用が増えれば税収も増えるから、収支が合うというのである。

しかし、このような計算には何の根拠もない。この二つの前提そのものが間違っている。だから、10%の削減を一挙に行えば、膨大な財政赤字が生まれるのは確実だ。それに加え、各種の選挙公約を実行すれば、今年度の財政赤字の対GDP比は10%を超えるだろう。

明らかに、FIDESZが勝利すれば、2010年のユーロ導入は遠のく。オルバン自身も、すでにこの目標を捨てているようだ。MTVのインタビュー番組で、FIDESZが政権に就けばユーロ導入時期が延期されるのではないかという質問にたいして、「だって、西側のアナリストも2013年とか2015年と言っているでしょう」と口を滑らしている。「数年の遅れを問題にしても仕方がない」という姿勢が見え見えだ。ここにFIDESZの公約の前提がある。つまり、政権奪取が第一で、ユーロ導入等の収斂政策は二の次。

もともと、ユーロ導入はハンガリー経済にとって、至上命令ではない。ユーロ導入が絶対目的ではないし、EUの新規加盟国が導入を競い合うべき対象でもない。国民経済の自力を付けることが先だ。ただ、ユーロ導入を目標にして、無駄な国家支出を削減し、財政規律を整えていくという意味はある。

他方、社会党が政権を持続できれば、2010年のユーロ導入に向かって動き出すだろう。政策の継続性があるから、社会の安定化には社会党政権の継続が望ましいと言える。

ただ、それが社会党の将来にとって好ましいことかどうかは、一概に言えない。

ハンガリーの民主主義の課題

ハンガリーの民主主義的規律は未だ非常に緩いと言わざるを得ない。社会党幹部が深く関わっているK&H証券を舞台にした詐欺事件では、与党幹部の疑惑はまったく解明されていない。ポシュタバンクの巨額不正の解明が完全に歴史から葬られただけでなく、ポシュタバンク売却に関わる国家資金の支出の疑惑についても、未解明のまま放置されている。司法が独立していないハンガリーでは、政権交代が司法に代わる相互監視の社会的役割を果たしていたが、社会党が続投するとこの役割機能が欠けることになる。

全体的にハンガリーの民主主義は発展途上で、「FIDESZゲート」と言われる今回のサーバー侵入事件もそのまま見過ごされているし、Magyar Vizslaの件も数あるうちの一つというだけになっている。検察幹部も国立銀行幹部も、FIDESZ政権時代の任命者で、政党色丸出しの主張を展開している。司法の独立性を高めることが次期政権の課題だが、二大政党にはそのような意識は希薄である。ここに二大政党制の弱点が如実に現れている。本来は相互に監視役を務めるはずだが、往々にして、互いの不正を消し合ったり、意識的に見逃したりすることになっている。明らかに、第三の監視役が欠如している。

ここらあたりは、現代の日本の政治状況と良く似ている。小選挙区制のために、少数政党が切り捨てられ、大政党だけが生き残る状況が生まれ、批判的な第三勢力の居場所がなくなっている。これは社会の民主主義にとって、深刻な問題を惹き起こす。日本の民主党のお粗末な対応を見ればよい。民主党も与党化してしまえば、あらゆる問題が深く追求されることなく見逃されてしまう。

ハンガリーの政治状況も同じ問題を抱えている。5%条項によって、MDFが議席を失ったら、国会には三つの政党しか存在しなくなる。場合によっては、自由民主連合も5%条項に引っかかる可能性もある。そうすれば、国会には二つの政党しか存在しなくなる。そうなれば、事実上の大連立政権になるが、ハンガリー社会の民主主義の発展にとって望ましいとは言えないだろう。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)